

官僚の官僚による官僚のための日本！？ 宮本政於

元厚生省検疫課長

1996年の本。

権力といえば、日本の国会を牛耳っているのは官僚にほかなりません。彼らが、国の法律をつくり、大臣の国会答弁まで抜かりなく準備するのです。答弁では、特定の個人であれ部署であれ、とにかく「責任の所在」を曖昧にしないではいけません。もちろん「現状維持」が鉄則です。ですから答弁たるもの、どこから見ても当たりさわりがなく、問題をはぐらかしながらも、そのくせ誠実と映ることが肝心なのです。

たとえば、こんな表現がよく使われるのです。「前向きに」という言葉は、「積極的に」とか「建設的に」との意味で、お役人は相手に希望をもたせる場合に用います。でも本音は「なにもしない」ことなのです。また、「鋭意」とは「熱心に」ですが、これも物事に大きな進展はないことを百も承知のうえで、とりあえず批判を避けるためにこうした文言を使用するのです。

「検討する」は、「調べ考える」わけですから、誠実な公僕は言葉どおり検討するのみにとどまるでしょう。ようするになにもしないわけです。さらに「慎重に」とくれば、慎重を期するあまり、動きがとれなくなることにつながり、やはり結論は何もしないことなのです。

「十分に」は、事態の解決まで十分すぎるほど時間がかかり、風化した時点ではじめてきわめて微細なる変化が可能だと言っているのです。

「努める」は努力は認めてほしいが結果は保証の限りではない、との意味です。

「配慮する」も、取りあえず案件について考えてはみるが、結局は未決裁書類箱の底の肥やしにしかありませんよ、という意味なのです。

官僚の文言がいったいどのような意味があるのか、そのお勉強をしてみましょう。たとえば、官僚の口からこんなことばを聞いたらどう解釈すべきでしょうか。

「この問題につきましては、前向きに、鋭意、検討させていただきます」

「本件に関しましても、慎重かつ十分に、配慮に努める所存でございます」

正しい解釈はいとも簡単です。

「われわれは、なにもいたしません」なのですから。

日本的集団は常になめらかな水面のようでなければなりません。そこに波紋が生じることは、集団を構成している基本が崩れることになるのです。

「根回し」とは、集団が常に一枚岩である、すなわち「みんな同じ」という幻想を維持するために行われている行動様式だ、と考えてもよいのです。

「根回し」は幻想を維持するだけでなく、幻想をつくり上げる作用もあります。

円を大きくすることができる官僚は出世の階段を登れます。具体的に言うと、課を大きくする。財団をつくる。ようするにより多くの人を「内」にとり込めるように、予算を引っ張ってくることです。見方を変えれば、国民からとり上げた税金を散財できる人が出世する、と言ってよいかもしれません。

その反対に円を縮小することは、他の「内」という組織を共有する人たちからすると恥をもたらすことになり、そのような官僚は無能と格印を押されるのです。

リストラをすることで小回りがきくようになり、生産性も上がる、それがわかっているにもかかわらず、官僚は自分たちの組織の縮小に絶対と言ってよいほど手をつけません。

日本の官僚組織がけっして小さくならない原因は、この「内」と「外」の概念と深い関係があるのです。